

27	豊能町立東ときわ台小学校	H28～R1
----	--------------	--------

令和元年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

通常の学級に在籍する児童のうち、発達障害等のある児童を含めて、学習上の困難さを有する児童（以下、「研究対象児童」という）について、教科等での学習における特別の教育課程を設定することにより、学習面・行動面の変容等、通常の学級における特別な教育課程の編成の成果が見出され、小学校における、より一層適切で連続的な教育課程の在り方が明らかになると考え、以下のような教育課程を設定した。

小学校の通常の学級に在籍する児童を対象として、下記の特別な教育課程を編成・実施する。

- ・特別活動において、社会性や全ての教科学習に共通する基盤となる力を育む活動を行いつつ、特別な内容を付加した『特別の時間「のびのび」』を設定する。『特別の時間「のびのび」』においては、研究対象児童に対して、それぞれの課題に応じた個別の指導計画を作成し、自立活動の内容の指導を付加する。

* 『特別の時間「のびのび」』については、今年度、次の時数を特別活動に付加し実施する。

1・2年生 12時間、3・4年生 15時間、5・6年生 3時間

* 『特別の時間「のびのび」』については、「身体感覚を中心とした活動」「ことばのやりとりを中心とした活動」「記憶や情報伝達を中心とした活動」の3つの活動を設定する。

- ・研究対象児童に対して、国語科での学習において、指導上特別な配慮や指導目標
- ・指導内容の一部変更、自立活動の内容を付加した個別の単元指導計画を作成し、指導する。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

- ・『特別の時間「のびのび」』について

特別活動の目標をねらいに、社会性や全ての教科学習に共通する基盤となる力に関する活動を行う『特別の時間「のびのび」』を設定した。また、研究対象児童に対しては個別の指導シートをもとに自立活動の内容の付加を行った。

『特別の時間「のびのび」』については1, 2年生 12時間、3, 4年生 15時間、5, 6年生 3時間実施した。「のびのび」は異学年が共に活動するように設定し、きょうだい学年の2-4年、3-5年、1-6年、さらに隣接学年の1・2年、3・4年の年間計画を立案し実施した。立案に際しては、昨年度の3・4年生の指導プランをもとに、系統性についての見直しを行い、年間計画を編成

した。

また、『特別の時間「のびのび」』の学習指導案の改訂を行い、研究対象児童について「目標を達成するための手だて」と「自立活動の内容」を加え、本時の展開には「研究対象児童の予想されるつまずき」と「研究対象児童のつまずきへの手だて」を考えるにあたって、その場の問題をクリアするための手だてではなく、「つけたい力」を育むための手だてについて検討した。

・国語科での自立活動の内容の付加について

特別の教育課程を編成していくにあたり、現在行われている授業がどの児童にとってもわかりやすいことが大きな前提となると考えた。この視点から、児童の実態把握をもとに、具体的な手だてを考えながら、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりの更なる推進を図り、この授業づくりの視点が他の教科等へと波及することをねらった。これらのことと合わせて、「のびのび」の取組みで得られた児童についての知見を国語科の授業づくりで活かし、研究授業を実施することを通して共有することで、実態把握や「のびのび」の取組みで得たものが、他の教科等でも活かされたり、教職員で共通理解を図ったりすることにつながることもねらった。

また、研究対象児童に対して、個別の指導シートをもとに、指導上特別な配慮や指導目標・指導内容の一部変更、及び自立活動の内容を付加した個別の単元指導計画を作成した。国語科の授業者は、これらをもとに、単元ごとに児童の様子や手だて、ねらいの設定を見直し、それらの記録を蓄積した。これらは、年6回実施されるPDC A会議において児童の実態把握のための資料とした。

今年度は以下のように国語科学習指導案の形式を改訂し、自立活動の内容を付加し、指導するにあたって、児童の実態に基づいて、単元を通して手だてを講じること、実態と付加した自立活動の内容に応じて具体的な手だてを明確にしておくことを行った。

- * 個別の指導シートと連動した研究対象児童の実態と付加する自立活動の内容とねらい、および必要と思われる手だて
- * 単元計画の中に、児童がわかるための「しかけ」
- * 本時については、対象児童の予想されるつまずきを挙げ、それに応じたつまずきに対する手だての具体的な記載
- * 個々の研究対象児童に付加した自立活動の内容の指導に関する手だての具体的な記載

・編成した教育課程を実施するにあたって、ベースとした取組みについて

以下の取組みを、編成した教育課程を実施するにあたって、学校全体で取り組み、他の教科等、学級経営等にも活用していった。

① 児童の実態把握

「児童の実態把握 気付きのチェックシート」、「文部科学省 チェックリスト」、「大阪府教育センターアセスメントパック」、「岡山県総合教育センターアセスメントパック」、中尾繁樹教授（関西国際大学）による児童の実態把握等を整理し、精選した上で、実態把握の年間計画の作成し、実施した。

児童の実態把握に関しては、研究対象児童だけでなく、全児童に対して実施

し、児童の学習状況の傾向を把握し、それらを「だれもがわかる授業」に活かした。実態把握から得られた本校児童の学習状況は以下のとおりである。

- ・視覚入力からの言語理解や言語知識は、学年が上がるほど少しずつ上昇しているが、短期記憶を伴う書き写しについては、思いのほか課題が見られた。本校では、これまで授業の中でのノート作り、ノートの活用を大切にされた指導を大事にしてきた経緯もあり、予想に反する結果となった。この実態を踏まえ、より具体的な工夫や支援の手だてを講じる必要があると再確認した。
- ・記憶に関しては、学年によってばらつきがあるが、視覚入力に比べ、聴覚入力による記憶や理解は、低学年では難しさを伴う傾向が見られた。聞いた内容を覚えたり、思い出したりすることについては、見た内容を覚えていることよりやや苦手な傾向が見られる。一度に多くの情報を長々と伝えるよりも、短い言葉や視覚支援も取り入れるなど、工夫や配慮をすることで、難しさを軽減できるのではないかと思われ、ユニバーサルデザインの視点を大切にされた授業における「視覚化」「焦点化」の大切さを再確認した。
- ・視覚入力による、空間認知や状況理解については、個人差、学年差が見られた。全体をとらえる際に、ある一部の事柄に着目し過ぎてしまい、正確な全体把握に至らないなどのケースである。学校生活での子ども同士の関わりにおいて、相手の表情の意味を読み取れなかったり、周囲の状況をよく把握せずに思い込みで決めつけてしまったりして、小競り合いなどもあるのではないかと思われる。ソーシャルスキルの視点を大切にされた集団作りにおいても、多様な視点で物事や自己を見つめる視点を育てていく必要があると考えた。

昨年度、研究対象児童を再検討し、①主に学習に困難さが見られる児童②主に対人面に課題が見られる児童③主に愛着、心理面に課題があると見られる児童④主に行動面（多動や不注意傾向）に課題があると見られる児童を自立活動の内容の付加を実施した。その上で、国語科での学習指導、『特別の時間「のびのび」』だけでなく、日常の生活指導やその他の学習指導において、教職員が児童の実態を共有して指導し、活かすことができるよう、研究対象児童が持つ特性や困難さ、課題、具体的な手だて、目標等を明らかにしたものを「個別の指導シート」としてまとめた。また、児童の実態を踏まえ、『特別の時間「のびのび」』や、国語科での研究開発支援員による授業観察及び、授業観察記録や日常の児童の実態を交流し、定期的に個別の指導シートの見直し（PDCA会議）を実施した。

② どの子どもも安心して過ごすことのできる学校・教室環境整備（基礎的環境整備①）
「教室環境チェックリスト」を運用し、長期休業中に実施することを定例とした。また、学校環境整備については、児童の委員会活動との連動を推進した。それに加えて、「学習室環境についてのチェックリスト」を用い、教室以外の環境整備の推進を図った。また、学習の基盤となる力の育成を図ることを目的とし、日常的に児童が取り組むことができることを考え、児童の実態と課題から、廊下等にコーナーを設置することも行った。

③集団づくりに関する取組み（基礎的環境整備②）

- ・前年度の学級の実態に基づいた学級経営方針交流会、年間2回の全教職員によ

る

学級の実態の情報交換

- ・PDC A会議による児童の実態と手だての共有
- ・学年縦割り活動（登校班遊び・縦割り清掃・きょうだい学年交流週間 等）
- ・全校朝会での取組み「みんな楽しく」 集団づくり
- ・全校朝会で多様性教育・ソーシャルスキル
- ・保護者への啓発と視点の共有、児童および教員の意識向上を図る取組み（人権参観・人権講演会）
- ・集団づくりに関わる授業研究
- ・児童会による学校目標の設定
- ・学校生活目標の設定

学校生活目標は、全校児童の実態把握から、共通課題としての対人スキルに関するものに特化して設定し、児童朝会で周知したり、児童会が児童玄関に掲示を行ったりしてきた。目標設定については、年度はじめは、「あいさつ」や行事に関する事など、児童が実行しやすく、成果を得やすいものから設定し、コミュニケーション力や互いのよさに目を向けることができるようにしていった。また、対人スキルに特化して設定することで、『特別の時間「のびのび」』との連動が図りやすく、児童にとっても教職員にとっても学校生活目標を意識しやすくなった。

以上のようなベースとなる取組みを行うことで、教員が意識の方向性を同じにすることができただけでなく、教科等の間での連携、指導の一貫性を図ることにつながったと考える。

（3）授業時間等についての工夫

「特別の時間」を、火曜日の4または6時間目に行うことを年度当初に決めておき、担任だけでなく、専科担任もかかわって児童の行動観察、手だての有効性の検証ができる時間割を作成した。そうすることによって、研究開発研究活動支援員を「特別の時間」において有効に活用することができた。あわせて、国語科においても、より「わかる授業づくり」に対する示唆と研究対象児童に対しての手だてやねらいが妥当なものであるかの検討、研究対象児童の実態の記録をもとにした「国語科 個別の記録」作成に、研究開発研究支援員を活用することができる時間割を設定した。

『特別の時間「のびのび」』の回数及び年間の活動については、以下のように考え取り組んだ

- ・5年生、6年生については、『特別の時間「のびのび」』を学校行事での全体での縦割り活動運営に発展させる。学年当初の『特別の時間「のびのび」』の授業のスタートに際して、きょうだい学年をファシリテートする役を担う。
- ・1年生については、実態把握の実施と学校生活に慣れる期間を大切にするために、1学期の回数を少なく設定する。
- ・3、4年生については、1、2学期各6回、3学期に3回実施する。4、3月を省いてできる限り定期的に行うことができるように設定する。
- ・1～4年生に関しては、一定の間隔をあけて取り組むことで、学校生活目標と関係づけたり、児童の実態を把握した上で、指導の手だてを改善したりしながら実

施できるようにした。また、国語科だけでなく、各教科等、及び学校教育活動全体への関連と、『特別の時間「のびのび」』での視点が活かされることをねらった。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

- ①児童の実態把握に基づく、個別の指導シートの作成
- ②個別の指導シートにもとづいた国語科及び『特別の時間「のびのび」』における自立活動の内容の付加
- ③P D C A会議を活用した児童の変容の把握、取組みや手だての評価・改善
- ④『特別の時間「のびのび」』での取組み

特別活動に付加した『特別の時間「のびのび」』については、児童の実態把握による課題をもとに「身体感覚を中心とした活動」「ことばのやりとりを中心とした活動」「記憶や情報伝達を中心とした活動」の3つの活動を設定し、研究対象児童をできるだけ困難さの傾向が異なる児童を各学年3名程度に絞って実施した。また、通級在籍児童、特別支援学級在籍児童を含んだ全体のバランスを考えて、各学年を①～③の3グループに分けた。きょうだい学年の2-4年、3-5年、1-6年、さらに隣接学年の1・2年、3・4年という異学年合同の授業を設定し、同じ番号のグループごとに3つの活動にローテーションで取り組んだ。

1クール（3時間）について、指導者は作成された指導案を元に、3回同じ授業を行う。児童は、時間ごとに①のグループがA→B→Cと②のグループがB→C→A、③のグループがC→A→Bというように活動を3種類経験して1クールが終了となる。授業はチームティーチングの形式で行った。1グループあたり2名の教師が入り、それぞれ主に授業の進行・支援の役割、児童観察・支援の役割を担う。

(2) 指導方法等は適切であったか

- ①児童の実態把握に基づく、個別の指導シートの作成
個別の指導シートを作成し、P D C A会議を行うことで、児童の困難さに対して自立活動の視点からの手だての実施、手だての評価及び改善が行われ、児童の指導に活かすことができた。また、教職員間での児童理解の共有が進んだ。
- ②個別の指導シートにもとづいた国語科及び『特別の時間「のびのび」』における自立活動の内容の付加
児童の実態から、自立活動の内容を付加し、具体的な手だてを、修正しながら行うことで、児童それぞれに応じたねらいと手だてが精選されてきた。国語科、『特別の時間「のびのび」』について、研究対象児童がアンケートで楽しいと答える割合も増加している。指導方法が児童に適応してきているためではないかと考えることができる。
- ③P D C A会議を活用した児童の変容の把握、取組みや手だての評価・改善
当初は、国語科及び、『特別の時間「のびのび」』での実態や、手だてを講じるために実施されている感が強かったが、回を重ねる中で、児童の実態の理解が深まったり、講じた手だてによって児童に変容が見られた。P D C A会議で話し合われた内容が、他の教科等や、学級経営で活かされていくようになっていった。
- ④『特別の時間「のびのび」』での取組み

単学級であることから、どうしても学級内での人間関係が大きく影響し、その人間関係の中で活躍の場面が限られる児童の姿が見られていた。逆に、困難さをもつ児童も、上の学年の立場になると「先輩」として、活躍する姿が見られた。

今年度は、活動計画に系統性及び発展性、関連性を持たせることに取り組んだことで、研究対象児童にとっては、活動に抵抗が少なく、取り組みやすく、授業者側からは、自立活動の内容のねらいに対する手だての有効性や修正点の検討を行い易くなった。児童全員にとっても、『特別の時間「のびのび」』が学校生活の中に位置づいてきた。また、チームティーチングを取り入れることで、一人の教師のバイアスに陥ることなく、児童の実態を多様な面から捉えていくことができた。これらのことは、児童にとって、それぞれの困難さや、強みを踏まえた有効な手だてに繋がっていったと考える。

実施回数を考えた時、『特別の時間「のびのび」』での取り組みだけで、児童の実態を把握し、適切な手だてを講じることをねらったのではなく、他の教育活動と連動させ、講じた手だての有効性を検証しながら手だてを改善するには、一定のスパンが必要であり、今回の実施計画は、一つの提案となると考える。

Ⅱ 実施の効果

1 児童・生徒への効果

① 特別活動『特別の時間「のびのび」』の取り組みから見えてきたこと

授業記録等から児童の姿を捉えると、異学年で交流し、互いによさを認め合いながら、学習の基盤となる活動を楽しんで取り組んでいる様子が伺える。（『特別の時間「のびのび」』において異学年との活動を設定し、活動の中で、自分のよさや友達によさを見つめることを行ってきた成果については後述の社会性測定用尺度についての結果を参照されたい。）今年度は、学校生活目標とリンクさせながら、取り組むことで、児童の学校生活目標への意識の高まりと、『特別の時間「のびのび」』の時間でのねらいへの意識の明確化が図られた。これらのことは、児童のみならず、教職員への効果も高く、具体的に生活目標を意識して児童と学校生活を過ごし、その中で「のびのび」を実施し、「のびのび」での活動やそこから得られた知見を、学校教育活動全体のなかで、児童にフィードバックしていくという行いすべきことが明確になった。このことは、「のびのび」での学習が、その時間にとどまらず、児童に生かされていくということであると考える。

② 国語科実態テストから見えてきたこと

学校が作成し、例年実施している国語科の実態テストにおいて、特に読解面での向上がみられる。【平均点 90.64(H28年度)→90.11(H29年度)→92.62(H30年度)】

向上の要因としては、以下のことが考えられる。

- ・国語科の授業づくりに関する研修や授業研究会を重ねることによって、教員の授業改善のみならず、児童の困難さに寄り添った手だてを具体的に考えることが教職員全体で共有され、授業づくりのベースになることが確認されたこと。
- ・授業環境及び授業づくりにおける教師のチェックポイントをまとめた「東ときわ台小学校授業づくりのためのプロジェクト」が浸透してきたこと。
- ・授業での、児童の困難さに応じた手だての具体化が図られてきたこと。

③ 生活アンケートから見えてきたこと

アンケートの記述の中で、多くの児童は「学校で友達と勉強したり遊んだりすることが楽しい」、「自分で頑張れたことがある」等、学校の楽しさや自分が感じた喜びや達成感を記述している。学習やのびのび、行事などの多様な学びの場で、楽しみながら粘り強く、前向きに取り組む様子が伺える。また、『学習で分かりにくかったところが少しずつ分かるようになってきたか』という問いに対しては、ほとんどの児童が肯定的な回答をしていた。具体的には、「授業がおもしろく、楽しく、覚えやすい」「みんなが発表してくれてわかりやすくなった」「先生がやさしく教えてくれた」「授業がわかりやすくなってきた」などの意見も出ていた。UDの視点に基づいた授業づくりや、自立活動の内容を取り入れた指導が、児童の理解の一助となっているように思われる。これらと関連して、『自分にはよいところがある』という項目も肯定的な回答の割合は多かったが、より自信を深められるように丁寧に指導していきたい。

生徒指導・友達関係面についても、自己の不注意以外で物がなくなったり、いやな思いを受けていたりという回答はほとんど見られなかった。

④ 社会性測定用尺度から見えてきたこと

・自己肯定感と自己有用感について

*高学年

高学年については、思春期の入り口に差し掛かる微妙な年頃であるが、自分に対する肯定感や、自分の良さを見つめる項目や、周りの人と仲良くしている、人の役に立っているといった項目が少し上昇している。これは、学年の宿泊行事や、学習活動の中で感じる達成感や、日々の縦割り活動や「のびのび」の時間、委員会活動やきょうだい学年などの異年齢集団における関わりを通しての有用感が反映されたように思われる。

*中学年

『特別の時間「のびのび」』の時間や縦割り活動、きょうだい学年、クラブ・委員会活動などで、時には先輩として、時には高学年に教えてもらう側として、いろいろな友達と関わりながら活動ができた。一方で、他者を意識し、友達と自分を比較したり、周りの目を意識し始める姿も見られ、自分に対して「無理やし」「ダメやし」という呟きが聞こえたりすることもあった。例えば、4年生はどの項目もやや否定的であった。その中で、クラスの人に対して、『相手の気持ちを考えて行動する』の項目のみ、【4.09pt(H29.7)➡4.18pt(H30.7)➡4.25pt(R1.7)】と、少しずつ肯定的な意見の割合が増えていた。これは友達との関わりの中で相手を思いやりのプラス行動をとらえていると考えられるが、一方で、相手のことを考えすぎて消極的になるマイナス行動につながっている児童もいるように感じられる。

*低学年

低学年は『特別の時間「のびのび」』の時間の他に、自然観察や体験学習など、定期的に異年齢での活動や地域のゲストティーチャーを招いての学びの場を設けてきた。2年生は下学年の意見をまとめたり、一緒に自然観察やダンスに取り組んだりするなど、小さな先輩として関わる場面もあり、こうした経験の自信も反映されているのではないかとと思われる。具体的な数値として「相手の話を素直に聞くことができる」、「相手のために我慢することができる」からも伺えるよう

に、相手との関わりを通して自分の行動を修正することが増えたことで得られた達成感もあるのではないかと思われる。

【研究対象児童に見られた効果】

自立活動の内容を付加した国語科の授業づくりや、自立活動の内容を付加した『特別の時間「のびのび」』に取り組むことによって、アンケートの結果から、研究対象児童が授業に意欲をもって、楽しく取り組む傾向がみられている。顕著に成果が見られたのは、「学習や対人関係に不安や自信のなさを感じている児童」と、「行動面での課題が見られる児童」であった。授業中の観察による評価のみならず、日常のテストや国語科実態テストでも向上が見られた。これは、これらの児童に対する手だてが適切であったと考える一つの指標となるが、プラスにつながったと思われる具体的な内容を挙げてみたい。

「学習や対人関係に不安や自信のなさを感じている児童」については、活動の見通しが持てる授業・環境づくりや、ペアトークや小グループ活動といったヘルプが出しやすい活動形態と安心できるクラス集団づくり、スモールステップで取り組める学習内容の工夫などが、児童の安心や学習への意欲・自己に対する肯定感につながったのではないかと推測される。

「行動面での課題が見られる児童」については、視覚刺激を減らした環境づくりや焦点化された学習内容、視覚支援やリスタートを取り入れた授業の工夫、落ち着いて活動に取り組める学習集団づくりは、集中を促す効果につながっているのではないかと推測される。また、協力ベースの楽しい活動を通して、周りの友達の言動やよさに着目することは、自己の言動への振り返りにつなげるきっかけとなった。また、友達からの相互評価を通じて、自己のよさやがんばりを再確認することにもつながっていたのではないかと推測される。

また、『のびのび』における異年齢集団の活動も、「誰でも安心して取り組める楽しい内容に少しずつ負荷をかけていく」ものであることが、どの児童も気軽に挑戦し、最後まで楽しく取り組むことができることにつながっていたのではないかとと思われる。その中で、色々な児童が豊かな発想や工夫を発揮したり、その活躍が別の児童のロールモデルになったりする姿も見られた。また、高学年にとっても下学年との関わり、楽しく力を合わせる中で、有用感を感じる場面もたくさんあったのではないかと推測される。

一方で、「愛着に課題が見られる児童」「対人面での課題が見られる児童」については、成果が見られた部分と成果が見られにくい部分があり、やや課題が残る結果となった。『特別の時間「のびのび」』や授業の中で、ある一定の成果や意欲・達成感は見せているのに「自己肯定感」が低かったり、知的に高く、学習や活動における成果は見られるものの、自分の思いや不安を上手く言語化・行動化できず、トラブルになったりする姿も見られた。集団における活動や人との関わり体験の中で、児童の適切な自己理解と社会性及び対人スキルの向上につながる、長期的な視野での継続した個別の手だてと振り返りが必要であると考えられる。

2 教師への効果

① 「どの子もわかる授業づくり」

今まで以上に授業づくりの工夫改善が見られるようになった。視覚・聴覚・触覚等からアプローチできる補助資料の提供方法、授業の組立・展開や児童一人ひとり

の課題に合った手だてについて校内研修会で意見を出し合ってきたことによる。また、日常的にお互いの授業観察を行い、その都度指摘されたことを改善していくようになった。その結果、図や絵の併用やICTの積極的な活用に取り組む教員が増えた。

② 「どの子どもも安心できる学校」

「教室環境チェックリスト」を作成して、落ち着いて生活できる環境、学習しやすい環境を再点検し、さまざまな改善を行った。また、学習室も「学習室チェックリスト」に基づいて再点検して整えた。こうして、それぞれの教室が学習しやすい状況になっていった。

また、校内の掲示板には、子どもたちの頑張りが見える作品や掲示委員会からの季節メッセージの他に、集団づくりやソーシャルスキル育成にもつながるようなメッセージコーナーを作成した。児童玄関のこのコーナーには、ポストが設置されており、テーマに合わせて児童たちが直接メッセージなどを入れられるようになっている。さらに、各階の廊下には、簡単なトレーニングのコーナーを設け、日常的に体の使い方を意識できるようにした。

こういった一つひとつの取組みを通して、子どもたちにとってどういう環境が望ましいか考えるようになり、また、子どもたちの日々の学校生活状況を丁寧に見るようになった。

③ 学年団会・部会・PDCA会議等の活用

単学級で各学年1名の担任で日々をまわしていかなければならない状況だからこそ、「チーム」で物事にあたるようになった。本研究においても、それぞれ担当のチーム会議が重要な役割を担った。

まず、低学年・中学年・高学年所属教員で構成された「学年団会」というチームで、日常の個や学級集団の状況を把握し、確認し合った。実践後にはPDCA会議で実践内容や手だてが適切であったかどうか検証を行った。PDCA会議は、基本的に低・中・高のそれぞれ学年団で行ったが、時に参加メンバーを拡大したり、SSWに参加してもらったりしながら、学級集団や対象児童の実態についてより深く分析を行った。多面的に子どもについて考察でき、より具体的な支援方法を考えることができるようになった。

また、『特別の時間「のびのび」』で扱う内容や手だてについては、校内研究組織の3部会（人権・生指部、行事健康部、授業研究部）でそれぞれ研究や相談をした後、全教員で授業展開を確認した。実践後は、各部会で振り返りを行い、次回の『特別の時間「のびのび」』で活かせるように工夫していった。

さまざまな形の「チーム」で対応していくことは、すなわち、複数の目で子どもたちを見取ることである。その中で、個々の困難さをより丁寧に把握することができるようになるとともに、教職員側も全児童に対して意識をもって接するようになった。さらに、日頃から、授業づくりや集団づくりについての会話が多くなり、自分の考えを整理したり新たな取組みを追加したりする機会が増えてきた。そういった場面から、意欲的によりよいものをつくろうという向上心が感じられる。

3 保護者等への効果

本校の研究については、初年度から学校だよりやHPで取組みの様子を伝えてきた。また、昨年度からはPTA総会でも授業の様子をスライドで紹介し、内容を報告している。中でも、特別活動の『特別の時間「のびのび」』の内容には興味を持ってもら

っていることが、学校教育診断アンケート「特活（特別の時間）の授業は楽しいと言っている。」に88%が肯定的な回答をしていることからもうかがえる。

研究の中心は国語科と特別活動『のびのび』であるが、その研究を活かした工夫や手だては他の教科でも行っている。授業参観後の保護者アンケートには、「明るく楽しい雰囲気の授業だった。」「様々な視点で物事を考えさせられる授業だった。」「お互いの意見をしっかり聞き合っていた。」「子どもたちが一生懸命考えているのがよく分かった。」等、本校が大切にしている視点について理解されていると感じるコメントが多く寄せられている。

昨年度初めて、国語・特別活動『特別の時間「のびのび」』に関するアンケートをとったが、どちらも7割以上が肯定的な評価であった。しかし、「わかる授業づくり」「認め合い支え合う集団づくり」では、数値を落としている。結果を真摯に受け止め、今年度は、補助資料の提示や活動内容のさらなる工夫改善だけでなく、話し合い活動や自主活動の推進にも努めている。本年度4月の全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「話し合い活動」について全国や大阪府と比べて肯定的な意見が大変高い。日常の取組みが子どもたちにも浸透しつつあるように思う。保護者へは、学校の取組みについてさらに発信していきたいと考えている。

Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

- ・『特別の時間「のびのび」』については、教科との関連を重要視しつつも、そのねらいの違いを明示することが必要である。
- ・研究を実施していく中で、児童の実態把握について、運営指導委員の先生方に実施していただいたり、指導をしていただいたりしながら行ってきた。実態把握に基づいた具体的な手だてについても、特別支援教育の視点を踏まえて、多くの指導をいただく中で、各教員が、理解し、少しずつ自分たちのこれまでの児童理解を、具体的な手だてにつなげていくことができた。これらのことを通して、専門的な視点からの児童の実態把握と、それに基づいた児童理解や具体的な手だてへの知見を得ることができる場やシステムがあることの重要性と必要性を感じた。
- ・「自立活動の内容」への理解を教職員全員が深めることが、大きな課題であった。運営指導委員の先生方のもとで、本校では学びを深めていくことができたが、通常学級の教員の立場で「自立活動」について理解を深めるには、研修を受ける機会があるか、自主的に学ぶかというところであろう。4年間の研究を通して、通常学級の指導においても、「自立活動」について理解し、その視点を適用していくことは、児童の発達理解と支援の大きな手だての一つであると考えられる。
「自立活動」について、特別支援教育の視点について、いかに学ぶかが、今後、学んでいくかが大きな課題である。

資料1

スローガン		東とさわ台小学校 す・て・き プロジェクト ～ 一人ひとりが主人					
月		4月	5月	6月	7月	8月	9月
生活目標 (R1年度)		気持ちのよい あいさつをしよう	みんなで 仲良く	力を合わせよう	失敗を おそれずに、 チャレンジしよう	(平和について 考えよう)	あたたかい 聴き方をしよう
全校朝会	発表の場 【学年・委員会】 (R1年度)	・1年生ははじめましての会 ・みんなdeSST	・登校班遊び ・運動会練習×4	・学びのルール ・オキナフ平和の話 ・みんなdeSST	・みんな楽しく ・平和の歌練習 ・「青い空は」 ・夏休みの作品例 ・夏休みのくらし	・私の考える平和 ・平和って素敵だね	・平和の折り鶴のお願 ・廊下での遊び方 ・クリーンアップタイム ・図書委員会
	みんな楽しく	H30年度					Let's脳トレ 【認知】 『5レンジャーゲーム』
		R1年度	みんなdeSST① 『気持ちのよいあいさつって?』	みんなdeSST② 『仲良く力を合わせるって?』	Let's脳トレ 【運動】 『清正ジャンケン』		
児童参画	児童玄関 みんなの広場 【児童参画イベント・掲示】	『あいさつ名人さん をすいせんします』	『ぼく・わたしの す・て・き協力エピソード』		『わたしの夢』 ～七夕飾り～	『ぼく・私の考える 平和』	
SST	みんな de ソーシャルスキル (R1年度)	・気持ちのよい あいさつって?		・仲良く力を合わせるって? ・掃除の仕方	・夏休みのくらし (生活指導)		・あたたかい聴き方はキャッチボール
	般化(汎化?)の場 【学校行事等】	・入学式 ・始業式 ・1年生ははじめましての会		・運動会		・平和登校日	・始業式 ・海洋学習 ・校外学習
人権教育5本柱等との関連		集団づくり			平和教育生活指導	平和教育	
T/S/S	集団づくり	【1年】 「ひとりぼっちのライオン」 ふわふわことばとちくちくことば 「ゆっきとやっち」		【2年】 グループ遊び 「およげないりすさん」 「いいところみつけた」		【3年】 「もやもやがき」 「心をしずめて」 「たつきゆうは4人まで」 「同じなかまだから」	
	部落問題学習	【1年】 「あなたってどんな人?」		【2年】 いいところさがし		【3年】 友だちたんけん	
	福祉・障がい理解教育	【1年】 福祉・聴覚障がい 「ぼくのだいしなあおいかな」 保育所・幼稚園との交流 ジェスチャーゲーム 手話で歌		【2年】 【聴覚障がい】 「たつちゃんぼくがきらいなの」といふことにはがたなこと		【3年】 視覚・知的障がい わたしのまち みんなのまち(社会) 地球にある バリアフリー設備を探そう 八田さんとの交流 点字・アイマスク体験 たんぼぼの家との交流	
	平和教育	【1年】 「そしてトンキーもしんだ」		【2年】 「ライオンがいなくなった どうぶつえん」		【3年】 「ピカドン」 世界の子どもたち	
	国際理解教育	【1年】 「こんにちは」 オリンピック・パラリンピック 「学校へいそぎ」 「せかい中のこどもたちが」		【2年】 「タヒチからの友だち」 「ロープのなみだ」		【3年】 「同じ小学校でも」 「わかってくれるかな」	
	男女共生教育	【1年】 「ばんごはんのしたく」 からだをきれいにしよう たいせつなからだをまもろう		【2年】 おへその話 わたしの生い立ち(生活)		【3年】 「じゅん子のななかみ」 男の子と女の子のちがいがい	
T/S/S	児童・集団のアセスメント	チェックデータ 新4年生チェック (岡山アセスメントシート・高学年用)・転入生含む		気付きのチェックシートII作成			1年生チェック(岡山アセスメントシート・低学年用)
	児童アンケート	行動観察 各学年行動観察(担任・支援Co・研究支援員)	研究協力者(中尾T)による行動観察			PDCA全体交流会 議(人間関係マップ作成・振り返り)	
	実態に関する交流・研修	困り感アンケート①		生活アンケート①	社会性測定尺度①		
	PDCA会議	個別の支援シート引継ぎ	5/13 低学年① 5/27 中学年①	6/10 高学年①		8/30 人権研修会 (PDCA全体交流会議)	9/9 高学年② 9/30 中学年②
	ことばのやりとりを中心とした活動		【2.4年】みんなで楽しく声をだそう 「お返事パスボール」	【1.6年】ことばからイメージをひろげよう 「運想ゲーム」 【3.5年】楽しみながら声をだそう 「早口ことば」	【3.4年】絵からことばをひろげよう 「ふきだしのことばを考えよう」	【1.2年】みたことばを絵にしよう 「お絵描きゲーム」 【3.4年】絵から想像をひろげよう 「お話をつくろう」	
	身体感覚を中心とした活動		【2.4年】崩れたバランスを立て直そう 「つなげてドンジャン」	【1.6年】体幹部を意識してから体を動かそう 「マットで心をあわせて」 【3.5年】バランスを意識しよう 「つなげてドンジャン」	【3.4年】体の使い方を考えて、バランスよく 「ピンポンだまりレー」	【1.2年】手や足を操作するコーディネーション運動のゲームをしよう 【3.4年】体幹部を意識して体を動かそう 「コロコロマット」	
記憶や情報伝達を中心とした活動		【2.4年】複数の情報を聴いて、楽しく体を動かそう 「オーダーツイスター」	【1.6年】相手の姿を覚え、分かりやすい言葉で伝えよう 「伝言ミッション」 【3.5年】見て覚えたことを、絵や言葉で伝えよう 「人間コピ」	【3.4年】複数の視覚情報を工夫して覚えよう 「暗号矢印」	【1.2年】聞いた情報を工夫して覚えよう 「あわてんぼうのトコちゃん」 【3.4年】聴覚・視覚の複数の情報を協力して覚えよう 「矢印でGO!」		
連携	保育園交流 小中連携	新1年生引継ぎ(保幼)		保幼小交流①			
	支援教育サポート	支援学級設置 支援・通級 家庭 特別支援保護者相談	支援学級設置資料作成(5.1)		6年度支援学級設置資料作成①		(夏季特別巡回相談)
	保護者サポート	支援学級保護者会サポート家庭(年度初め事前相談)	要サポート家庭保護者定期面談(月1ペース・ケースによりSSW含)			支援学級保護者交流会	

公！ みんなの力で すてきな 東ときわ台小学校にしよう！ ～						
10月	11月	12月	1月	2月	3月	
友だちの いいところを 見つけ合おう		あたたかい 言葉で 話そう	声を かけ合い、 上手に 話し合おう	あたたかい メッセージを 伝え合おう	伝	
- 6年折り鶴完成 報告 - みんな楽しく - 5年生 - 修学旅行報告会 (6年生) - クリーンアップタイム	- 登校班遊び - マラソン朝会 × 3 (体育委員会)	- マラソン朝会 (体育委員会) - 1年生 - 4年生 - 冬休みのくらし	- 地震避難訓練 - 2年生 みんなde SST	- 3年生 - みんな楽しく - みんなde SST	- 6年生を送る会 - 卒業式予行 (体育館使用不可) - 春休みのくらし	
- なるほど the world II (全2回) (①世界のくらし ②世界のファッション)		みんなde SST 『しずかちゃんをめざそう』 (アサーティブな コミュニケーション)				
Let's脳トレ 【ことば】 『俳句に親しもう』			みんなde SST③ 『い手、どんな気持ち？』	なるほど the world III みんなde SST④ 『アサーティブ コミュニケーション』		
『俳句にチャレンジ』	『友だちの「いいね！」を紹介しします』		『新しい年を迎えて～チャレンジしたいこと～』	『身近な人へ あたたかいメッセージを伝えよう』		
	- わたしのもちあじ	- ふわふわ言葉と チクタク言葉 - 冬休みのくらし (生活指導)	- 気持ちを感じて 向き合おう 【感情】	- 気持ちを上手に 伝えよう 【アサーション】	春休みのくらし (生活指導)	
- 修学旅行 - 人権朝会 I - 人権参観	- 学習発表会	- マラソン大会 - 人権朝会 II - 終業式	- 始業式 - 児童会カーニバル		- 6年生を送る会 - 卒業式 - 修了式	
平和教育	部落問題学習	(人権月間) 生活指導	集団づくり	国際理解教育		
	【4年】 「心の答え合わせ」 「いじりじめ」 二分の一成入式 「絵はがきと切手」 「三つのつづみ」 「ちこく」	【5年】 「名前のない手紙」 「折れたタワー」 何と言ってもこれが欲しい		【6年】 権利の熱気球 「わたしのせいじゃない」 「ブランコ乗りとピエロ」 「それじゃ、ダズじゃん」		
	【4年】 ドリームツリー	【5年】 「ほんまにやさしいまごでっせ」		【6年】 洗染一揆		
	【4年】 福祉・肢体不自由 認知症ってなんだろう (豊能町認知症キャラバンメイト) 文字を書く喜び(星野富弘さん) 車いす体験	【5年】 知的障がい たんぼぼの家との交流		【6年】 福祉・様々な人々との交流 私たちの生活(社会) 高齢者との交流 シルバーセンター 子育て支援センター		
	【4年】 「かわいそうなぞう」 「すみれ島」 「つるのつづみ」(DVD) 「一つの花」	【5年】 「この子たちは？」 「父さん 僕の足も地雷に」 「母さんの歌」		【6年】 「ヒロシマには感はないんよ」 「ヒロシマに一番列車が走った」 「夏服の少女」(DVD)		
	【4年】 「海をえて」 「いろいろな食べ方」	【5年】 「コリアンタウンへようこそ」 「ペルー」はなっている 「マインツからの便り」		【6年】 「エルトワールル号」 「東京オリンピック」		
	【4年】 育ちゆく私(第二次性徴)(保健)	【5年】 「自然に 私のみまで」 ヒトの誕生(理科)		【6年】 「一票の権利」 快適な距離について考えよう (パーソナルスペース)		
				気付きのチェックシートⅡ作成(引継ぎ資料)		
					学級実態スクリーニングシート作成(引継ぎ資料)	
生活アンケート②	困り感アンケート②	社会性測定尺度②		生活アンケート③	社会性測定尺度③	
				学級実態交流(支援学級含む)		
10/7低学年②			1/20低学年③	2/3中学年③ 2/17高学年③	個別の支援シート引継ぎ資料作成	
【1.2年】友だちのことばをきいて伝えよう 「お絵描き伝言ゲーム」 【3.4年】絵から想像をひろげて 「表情に合うことばを考えよう」				【1.2年】みたことばに 「なぞなぞ」 【3.4年】うごきのことばにしよう 「伝言ゲーム」		
【1.2年】バランスに気を付けて 「バランスゲーム」 【3.4年】力の入れ方を考えよう 「大根ひき」				【1.2年】リズムに合わせて体を動かそう 「昆虫太極拳」 【3.4年】合同に反応しよう 「ねことねずみ」		
【1.2年】形を分割してとらえ、全体像につなげよう 「カギを探そう」 【3.4年】情報を正確に伝え合い、協力してまとめよう 「私たちのお店屋さん」				【1.2年】見たり聞いたりしたことをもとに工夫して考えよう 「びったり迷路」 【3.4年】形を様々な角度からとらえ、工夫して考えよう 「おうらつなぎ」		
保幼小交流②				体験入学 保護者説明会 中学校1参観		
	次年度支援学級設置資料作成②			次年度支援学級設置資料作成③	ステップファイル中学校引継ぎ(返却)	
				特別支援保護者面談	(春季特別巡回相談)	
	支援学級保護者会			支援学級 卒業お祝い会		